殺戮の館

きぃ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
殺戮の館

【Ｎコード】
Ｎ５２６２Ｉ

【作者名】
きぃ

【あらすじ】
ここはどこ？
目覚めた場所は見知らぬ場所。
自分が誰かも分からず、捜索を開始する。
待ち受けていたのは過酷な罠とわたし宛の日記だった。

プロローグ

あか。
あか。

見渡す限り、赤ばかり。

目の前は無数の赤い花が広がっている。
そして、すぐ近くには白い洋館が見える。

やわらかい風。
赤い花は風に吹かれて、きらきら輝いている。

風に強く吹かれ、花びらが舞う。
そして、雪のように散った。

それはとてもきれいな光景だった。

花びらが散る中、赤い花畑の中に人が見える。

ここからでは顔がよく分からない。

だけど、きっと。きっと。

「こっちにおいでよ」優しい声がする。
わたしを呼んでくれている。

すぐに行くから。まってて・・・・・・。

プロローグ（後書き）

ゲーム「デレジア」を参考にしております
なお、死体及び血が苦手な方はお気をつけください

部屋の中

ここはどこ？
夢から目が覚めると見知らぬ部屋のベットで寝ていた。

見知らぬとは何だ？
わたしはいつものように自分の部屋で・・・。

そこまで考えて気がついた。
いつもの行動がまるで思い出せない。
きっと、起き抜けで頭が回らないだけだ。
そう思い冷静になろうとする。

だめだ。やはり何も思い出せないのだ。
そうなにも。
頭が真っ白になった。

自分のことも思い出せないなんて。

かろうじて、自分が女性であることだけは分かる。

とりあえず、あたりを見回してみる。
誰かがわたしを呼んでくれていたような気もするが、あたりには誰も居ないようだ。

部屋は大きいわりに殺風景なもので、ベットと机があるだけだ。
机の上には何か紙切れが置いてある。

この家の見取り図かしら？

随分と大きい施設のようだ。
よく分からないが、これは持っていたほうよさそうだ。

部屋の中（後書き）

むずかしいです

トラップ

他には何にかないかしら？
そう思い、机の引き出しを開けてみる。

≪びゅっ≫
「あぁ」
中から飛び出してきたナイフで右手を切る。
強烈な痛みとともに手から血が流れ出す。

思わず、あとずさりする。
何？この仕掛け・・・？

ぽたぽたぽた・・・・・・。と小さな音をたてながら流れ落ちる血。
それをどこか遠くの出来事のように見つめる。

・・・あか、あかい・・・・・・赤い花畑？
夢の中で見たものと同じ花？

なぜか赤い花畑の映像が流れ込んできた。
＝　　＝
声？
声が聞こえる。

ふと我に返る。

なぜ？こんな仕掛けがされている？
ひどく焦りを感じた。
なんでもいい、ここから出なければ。

わたしは手を抑えつつ、部屋から出ることにした。

トラップ（後書き）

＝＝は過去に聞いた声。フラッシュバックのような感じです。

扉

部屋には２つの扉(ドア)がある。
机の近くとベットの近くに
ベットが現在地だとすると机は前。２つのドアは対極当たる。

地図を見ると、右にまっすぐいくと階段があるようだ。
ベットの近くのドアを開け、部屋を出る。
灯篭のような照明があるがなんとも薄暗い長い廊下だ。

まずは階段を目指し歩いていく。
しばらく歩いていくと目の前に土砂が立ちふさがった。
どうやら、そう簡単にはこの施設からは出られないようだ。

他にいける道はないだろうか？
地図を確認すると遠回りになるが反対側にも階段があることに気が付いた。
その階段を登るには一度来た道を戻り、さらに目覚めた部屋の中を通らなければならない。

あの部屋を通るのか。・・・・・・なんか、いやだ。
だが、嫌がってもしかたない。

扉（後書き）

伝わるといいのですが

再び

また戻ってきてしまった。
目覚めた部屋の前で立ち尽くすわたし。
あんな仕掛けがあったのだ。戸惑いを隠せない。

意を決して、ゆっくりとドアを開ける。
先ほどと何一つ変わらない光景だ。

さっきほどの出来事がうそのようだ。
おもわず、ほっとする。

早速、もう一つのドアを開ける。
廊下に出るとこちら側には部屋がいくつかあるようだが、左奥にある階段を目指すことにする。

それにしても、長い廊下だ。ただまっすぐに伸びている。
薄暗いせいで赤い床はまるで血のようにも見える。

やっと曲がり角だ。ここを曲がれば階段が見えるはずだ。
喜びをすこしだけ感じて角を曲がった。

「わっ」
思わず声が出た。
いきなり降ってきたナイフを反射的によける。
しかし、わずかに頬を掠めた。またしても血が流れ出す。

ナイフは天井から紐で吊るされていて、顔の辺りで振り子のように揺れている。

何だってこんな仕掛けがされている？
もはやそんなことを考えても仕方ない。ここから出ることだけを考えるのだ。

日記

・・・・・なに。あれは？
目の前には土砂ではないが扉がある。
しかも、鍵が掛かってる。
鍵を探さなければいけないらしい。
面倒だが仕方ない。

まずは階段のすぐ目の前にある部屋から捜索を始める。
ただし、できるだけ慎重に。
さいわい鍵はかかってはいない。

この部屋はどうやら書庫のようだ。
部屋には４つの本棚がある。本棚には難しそうな本が詰め込まれている。

本棚に入らなかったのか、本棚の手前に置いてある机の上にもどっさりと本が積まれている。
よく見ると詰まれた本の下にメモ書きのようなものが。
吸い込まれるように紙を手に取った。

なにかしらこれ？
日記？
【彼女の髪は栗色できれいだった。わたしは違う黒くて汚い。】と書かれている。

少女の笑顔が頭をよぎる。

栗色の長い髪の少女？

どこかの洋館でわたしを覗き込む少女の姿が浮かんだ。

誰・・・・・・？

薬？それとも毒？

しばらく、メモを手にしたまま立っていたらしい。
今の映像はおそらく昔の記憶だろう。

机に積まれている本は医学関係のようだが、今のわたしには必要ない。
となりにも部屋があるようなので行ってみる。

「っ」
声にならない。手に痛みが走る。
流れ出る血を抑えながら後ろに下がった。

さきほどとは比べものにならない量の血が流れ出しだす。
このまま血が流れ続けては死んでしまうのではないか？
恐怖すら覚える。

≪とん≫
机にぶつかった。
ぶつかった衝撃で手に何かが触れる。

これは薬か？毒かもしれないがなんでもいい。
早く何とかしなければそう思い口にする。
どうやら、毒ではないようだ。痛みが少し楽になった気がする。

よくみるとノブから刃物が飛び出している。
この場所には　罠（トラップ）が仕掛けられている。
そして、わたしの命を狙っているに違いない。

部屋から部屋へ（前書き）

部屋と部屋の移動
（廊下を歩いている所）はカットしております

部屋から部屋へ

隣の部屋は会議室のようだ。
大きめな収納棚が２つと部屋いっぱいの大きな白い机。そしてサイドボードがある。

サイドボードには紙切れがピンで留められている。
【どれだけ彷徨い歩いただろう？病院にいるとあの洋館を思い出す】
と書かれている。
もしかして、ここは病院なのか？

映像がよぎる。
どこかを目指して。
いや、何かから逃げ出すかのように、歩いていた気がする。

≪ぽた、ぽた・・・≫
小さな音が聞こえる。血の音で我に返る。
手をハンカチで縛ってみたものの、流れる血は止まりそうもない。

・・・・・この部屋にはもう何も手がかりはない。
というよりあまり触りたくはない。なんだか不気味な光が所々見えるから。
会議室の右隣は最初に目覚めた部屋と間取りが同じだ。

違いは机の上に花が生けてあるくらいか。
花はとうに枯れ原型を留めていない。

気をつけながら花瓶に手をかける。
≪くしゃ≫

少し触っただけで花びらは粉々に崩れ、机の上に散った。

部屋から部屋へ（後書き）

収納棚は木で出来ていて
高さ１５０ｃｍ・横１００ｃｍのガラスの扉が付いたものです

鍵

手にまだ花びらの感触が残っているが、気にせずに花瓶の中を確認する。
底には鍵らしきものが見える。慌てて手を突っ込んで取り出す。
鍵には霊安室というタグが付いてある。
階段の鍵だと思っていたので少しがっかりな気持ちになる。
だけど、役に立つかもしれないので、スカートのポケットに入れておく。

最初の部屋は調べる必要はないので、その隣の部屋に入る。
ベットが8個ある。この部屋は8人部屋のようだ。
1つ1つに枕とシーツと布団が掛けられている。

ベットとベットを遮るカーテンのようなものはない。
しかも、ベットの下にはなにやら鉄の塊のようなものが見える。

また何かのトラップだろう。
うかつに探らない方がいい。そう思い部屋を後にする。

次は正面にある部屋だ。開けるとまた8人部屋だった。
間取りも先ほどと同じ。
おまけにベットの下には同じ仕掛けがされているようだ。

いや、違う。よく見るとベットの下に鍵のようなものが見える。
だけど、手を出せば仕掛けが作動するだろう。
どうしようかと頭をフル回転させた。

道具

もしかしたら、他の場所に使えるものがあるかもしれない。そう思い左の部屋を開ける。
今度の部屋は６人部屋だ。ベットが２つ減っただけで後は全く同じようだ。

ベットの１つに妙な膨らみがある。
トラップかもしれないので慎重に布団をめくる。

そこにはハンマーが置いてあった。
これも役に立つかもしれないので、持って行くことにする。
そのとき、ひらりと何かが床に落ちた。
どうやらハンマーと一緒に置いてあったらしい。

【わたしは罪を償わなければならない。そのためにもワクチンを作り出す】
そうだ。
わたしは罪を償なわないといけない。

・・・・・・罪？いったいなんの？

頭がいたい。
突然の痛み。先ほどからの物理的な痛みとは違う。

なんだ？わたしは何を忘れてる？
だめだ。
・・・思い出せない。

穴

頭を抱えながらも隣の部屋に向かうわたし。
忘れていることを思い出さなければならない。そんな気がして。

隣の部屋も6人部屋だった。
この部屋は脆くなっているようで、左の壁に穴が開いている。
穴からは骨組がみえる。もしかしたら使えるかも。
思い切りハンマーでその箇所をたたく。

≪ど、ど、ど、ど、どが≫
無事破壊し、角材を手にした。
破壊した箇所は人が通れるくらいの穴が開き、隣の部屋が見える。

あれは？
奥のほうに何かがある。
ベットとベットの間の床に。なんだ？

トラップの存在も忘れ足を踏み入れる。
≪どさ≫
足に何かを引っ掛けこける。
危ない。直感的に右に避ける。

≪どん≫
鈍い音とともに大理石の置物が落ちた。

戸惑い

頭の左側には先ほど落ちてきた大理石の彫刻がある。
心臓がバクバク言っている。
こんなものが、頭に当たっていたら考えただけでもぞっとする。

気を取り直して落ちているものに目をやった。
またしても日記。
【彼はなんだか頼りなさそうだけどわたしとは話が合いそうだ。
これから毎日会ってくれるらしい。楽しみが増えた。】

彼？だれだ？
橙色の髪。どこかたよりなくて。
そして・・・・・・ずっと苦しみを抱えていた人だった。

暖かい。顔も思い出せないのに。
とても暖かな気持ちになる。
この気持ちは何だ？

ふと右に目をやるとベットの上に懐中電灯が落ちている。
これも役に立つかもしれない。持って行くことにする。

そして、先ほど手に入れた角材で鍵を引きずり出そうと決めた。

苦痛

８人部屋のベットの下までやってきた。
角材を手にし、仕掛けを作動しないように鍵をつつく。
薄暗い部屋な上にベットの下はさらに暗い。なかなか、難しい。
そうだ。懐中電灯。
懐中電灯でベットの下を照らす。
これなら、うまく取れそうだ。
鍵のさらに奥に紙切れ？
暗くて気づかなかったがここにもあったようだ。
それも一緒に取り出してみる。

【新しいワクチンを打ってくれたようだ。だけど、副作用があるかもしれない。彼はそう言った】
「大、大丈夫か！？」
意識を取り戻したとき、彼の心配そうな顔が目の前にあった。
「ええ？大丈夫よ？でも、なにがあったの？」と訪ねてみた。
「心配しなくていい。もうなにも」
わたしを安心させるかのように優しい笑顔で、新しいワクチンを見せてくれた。

これで、みんな助けられたはずなのに。
助けられたはず？
頭が・・・・・・いたい。
どうして？

どうして、助けられなかったの？

どうやら、わたしは思い出さなければならないらしい。
この痛みから解放されるためにも。

月光

≪ぽた、ぽた・・・・・・≫
手をハンカチで縛っているとはいえ、血は止まることなく流れ続けている。
そんな音を聞きながら、階段を上るわたし。
徐々に淡い光が差し込んでくる。

月？満月だろうか？

どうやらいままで、地下にいたようだ。
月明かりとはいえ、久しぶりに光を浴びた気分だ。

階段を登って、すぐ目の前にあった受付を横切り出口に向かう。
出口は分厚い防火シャッターで閉ざされていた。
しかも、上げるためのボタンは壊されている。

やはり、すぐには出られないか・・・。
なんとなく予想はしていた。

他の出口を探すか、シャッターを破壊するしかないようだ。
それに、まだ外に出るわけにも行かない。
すべてを思い出してはいないのだ。
そのためには先ほどから見つけている日記。

だれかが、わたしに過去を思い出させるために置かれたもの。
きっと、これから先にも置いてあるに違いない。

すぐ近くにあった受付から、とりあえず調べてみる。

受付の机の奥に鍵らしきものがあるが、他に使えそうなものはない。
鍵には診察室というタグがついていた。

殺し

診察室の鍵を手にしたわたしはまっすぐ歩いた。
すると、目の前に霊安室と書かれた部屋が見える。
そういえば、霊安室の鍵があったな。と思い出したわたし。
嫌な予感しかしないが、その鍵で開けてみる。

やっぱり。
そこには土に埋められることもなく、腐敗した数体の死体が大きな白い台の上に、仰向けで置かれてあった。
なぜだか死体を見てると申し訳ない気持ちになる。
でもなぜ？

ふと死体にまぎれて日記を見つける。
【薬を処方してあげた子供の様子がおかしい。処方の仕方を間違えたのかもしれない】
その子供は結局死んだのだ。間違った治療をしたせいで。

わたしが殺した。わたしが殺した。
頭の中で何度もその言葉が復唱される。

「わたしが・・・・・・殺した」
恐ろしくなった。自分が過去にしたことを。
恐ろしくて、恐ろしくて、胸が苦しい。

殺し（後書き）

もうすぐ、ＰＶ１５００にユニーク３００です。
たくさんの皆さまに来ていただいてありがとうございます。

声

殺したのだ。
殺したんだ。わたしが。

あの人たちを・・・・・・。

あの人たち？
薬の処方で死んだのは1人だけだったはずだ。

まだだ。まだ後悔するには早すぎる。
もうすこし、思い出さなければ。

今度は診察室と書かれた部屋が見えてきた。
鍵で部屋を開けると机に椅子そして診察用のベットが置かれている。
椅子には白衣が掛けられている。

懐かしい。
なんだか、懐かしさでいっぱいになる。
・・・・・・この白衣も持っていこう。
着てみると違和感がない。むしろしっくりくる。
きっとこの白衣はわたしのものなのだろう。

ここで始めて、右ポケットに紙切れが入っていることに気がついた。
【ワクチンはもうストックがなくなった。また新しいワクチンを造らなければ】
「アーツ。悲しんでる暇はないわ。新しいワクチンを造るのよ」
「ああ、そうだね。そうしよう」
わたしはすっかりうなだれている彼に叱咤した。

彼はそれでも悲しげな表情を見せていた。
すこしは立ち直ってくれただろうか？

以前のワクチンは完璧なものでもなかった。
今度は完璧なものを造らなければならない。

時間がないのだ。
おそらく、わたしも同じウイルスに侵され始めている。
ウイルスによって、体に赤い線がたくさん現れてきたのだ。
意識もだんだんとなにかに乗っ取られるように薄れてきた。

＝メイリィ＝

「メイリィ！」

『メイリィ！』

誰かの叫び声が・・・・・・聞こえる。

声（後書き）

ちなみに彼女は黒いぽいスーツを着ています。

過去

少しずつ記憶が戻ってきている。
でも、完全じゃない。
過去に何があったのか？

思い出すのを後悔するのはそれからでもいい。

隣の部屋も診察室だった。間取りも同じ。
４つある机の引き出しを一つずつ、ゆっくり開ける。

３番目の引き出しに紙切れが入っている。
【謎の病気（ウイルス）が町中を襲った。その病気（ウイルス）の原因を造ったのはわたしだ】
この日記を見たとたんに鼓動が早くなる。

そうだ・・・思い出した。
薬の処方に失敗し、子供は死んだ。
だけど、それだけでは終わらなかった。

謎のウイルスに変化したのだ。
暴れまわり、人を傷つけ、殺し合い、そして最後には自殺する。
このウイルスによって何人もの人々が狂いながら死んでいった。

「また１人同じ症状で死んでしまったわ」
いつもと変わらぬ口調で言ってみたものの、唇は震えてしまっている。
「ワクチンは間に合わないかもしれない。このままだと全員死ぬ」
彼は頭を抱えながら、自分を責め続けている。

自分を責めたところで状況は変わらないのに、ずっとこんな感じだ。
だけど、アーツが苦しいのは理解している。

わたしだって本当は怖かった。
目を背けたかった。

ウイルスを造りだしたのが自分(わたし)自身だということを。

拒否

拒否反応が出てきている。
思い出したくない。思い出したくない。

苦しい。

もう、ここから出るだけでいい。
でも、本当にここから出られるの？

不安を感じながら、ゆっくりと2階へと続く階段を登っていく。

≪ぽた、ぽた・・・≫
流れ落ちる量は減ったとはいえ、血はまだ止まることなく、流れ落ちている。
階段を登りきったところに小さめの窓が見える。

窓の外を覗くと薄暗いがなにかある。
どうやら、ちいさな花壇のようだ。
庭に花が植えてあることに気が付いた。

名前も知らない赤い花。
月明かりに照らされて、とても神秘的だ。

赤い花？
赤い花を見ているとまた何か引っかかる。
・・・・・・マーテル。

そうだ、あの花は。

「たくさん花が咲くといいね。きっと、みんな癒されるよ」
そういいながら、マーテルは花の種を植えていく。

洋館の裏に広い原っぱがあった。
彼女は洋館の窓から見える花畑を造ったのだ。

町が病で汚染された状態だったのに、マーテルは変わらなかった。
自分よりも他人のことを思やる。そんな子だった。

まるで、女神みたいだった。
わたしは彼女に救いを求めていた。

そのマーテルはどうなった？
そして、記憶の中に出てくるアーツのことも気になる。

後悔

すぐ目の前にあった私室と書かれた部屋に入ってみた。
部屋の中には立派な机に本棚が２つ並べられている。
右の本棚から本が１冊、飛び出している。
その本を引き出してみるとはらりと紙切れが落ちた。

怖い。
手に取るのが怖い。
思い出すのが怖い。

本当に
思い出さなければいけないの？

一瞬ためらいがおきた。

だけど、思い出さなければいけない。
心を震わせ、おそるおそる紙切れを手にした。

【国軍がやってきた。目的はウイルス。邪魔者は殺されるだろう。】
いままでいくら助けを求めても、何もしてくれなかったくせにいきなり国軍が現れた。

なんなのだ。一体。
全部で２０人くらいだろうか？
国軍はマシンガンを手にしている。

どうして、国軍が銃を向ける？
私は目の前の光景が信じられなかった。

「いいか。抵抗するなよ」とその中の1人が脅しをかける。
そいつらは傍に居た子供たちを羽交い締めにして、注射を打つ。

「何をしたの？」
マーテルは勇敢にも立ち向かっていく。
「ああ、冥土の土産に教えてやる。おれたちの目的はウイルスさ」
そう言い放った瞬間、奴らは火炎放射機で炎を上げた。

恐ろしくなった。
このままでは殺される。
そう思ったときには逃げ出していた。

『メイリィ』
アーツの叫び声が聞こえたが、そのまま走り出していた。

見捨てたのだ。怖かったから。
わたしはたくさんの人を死なせただけでなく、彼らも見捨てたのだ。
そんな事実、思い出したくなんてなかった。

ぬくもり

苦しくて、苦しくて逃げ出したかった。
かといって、この病院からは逃げられない。
なのに、わたしは部屋から飛び出し、廊下を走り出していた。

長すぎる廊下を走ったせいで、疲れが出たが歩き続ける。
「はぁはぁ・・・・・・」
息が荒くなってきた。
頭も体もうまく働かない。
ぐらりと体が揺れる。足がもつれる。

・・・めまいがする。
どうやら、ここまでかしら?

ゆっくりと体が崩れていくのを感じ、倒れこんだ。
白衣のポケットから、紙切れがはらりと落ちる。
止まることのなかった血が、血だまりを造り始めているのが見える。

このままここで死ぬの?
外に出ることもできずに。

だけど、体はもう動かない。いや、動きたくない。
考えることさえしたくない。

もう、疲れた。
いっそう、このまま眠ってしまおうか・・・。
ゆっくりと目を閉じた。

どのくらい倒れていただろうか。

温かい。
手にぬくもりを感じる？
朝日が昇り初め、日が差し込んで来たのだ。

ピクリと手を動かす。
手を動かしたことで、より温かみを感じだ。

そうだ、わたしはまだ生きているんだ。

こんなところで、倒れている場合ではない。
体を起こし顔を上げ、最後の部屋に向かう。

エピローグ

最後の部屋は院長室と書かれてあった。
中には今までになく大きて立派な机と本棚がある。
部屋の隅にはなぜか、プラスチック爆弾が置いている。
これを使えばシャッターを破壊できるだろう。

だが、その前に机の上に置いてある手帳を手にとって見る。
そこには今まで見つけた日記と同じ筆跡で医療のことが書かれてある。

そして、最後のページには
【日記をこの病院に隠す。全ての記憶を取り戻して欲しい。
そして、必ず罪を償って欲しい】と書かれていた。

思えばわたしは逃げてばかりだった。
でも、償わなければならなかった。

なにより彼らに・・・・・。

やっと出られた外の世界。さらさらと風が心地よい。
既に行く場所はもう決まっている。わたしが見捨ててしまった人たちのところだ。
血を流しすぎたせいで、重い足取りだが確実に足を進める。

早く行こう。
今度こそ罪を償うんだ。

エピローグ（後書き）

今までたくさんの人に読んで貰いありがとうございます。
続編もＵＰしますのでよろしければそちらも読んで貰えるとうれしいです。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5262i/

殺戮の館

2010年10月10日23時06分発行